れいむとシロ　【改】

ねっぷう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――かつて、国がまだ形の定まらぬ「気」であった時、澄んだ清浄な「気」は上へ昇って人間となり、濁った邪な「気」は下に溜まって１匹の大妖怪となった。

国々を点々とし悪行の限りを尽くした大妖怪は、数千年の時を経てようやく退治された。

一方、現世とは隔絶された楽園・幻想郷は突如として降り注いだ流星群によって打撃を受け、さらに外来の侵略者の脅威に晒されていた。

博麗霊夢は幻想郷を救うため、侵略者「マガノ国」との戦いへ身を投じてゆくのだった。

※この作品は筆者が以前投稿していた「れいむとシロ」のリメイク作品になります。が、話の筋や設定が大きく変わっています。

※また、筆者が過去に完結させた別の作品の要素もリサイクルして取り込んでいます。

目次

第一話「狐と巫女」 1
第二話「ふたりの願い」 8
第三話「反逆の鐘」 14
第四話「光臨」 20
第五話「絶対強者」 25
第六話「獣の槍」 32
第七話「未知の獣と白き獣」 39
第八話「マミゾウ大親分」 46
第九話「絶望と倦怠の波」 52

第一話「狐と巫女」

少しだけ昔の話をしよう。
今から5年前のことだった。何の前触れもなく空から降り注ぐ紫色の流星群が幻想郷を襲った。
数多の妖怪と生き物たちが死に絶え、大地は燃え、山は熱を吹き出し、森は半分以上が炭となった。一夜にして死の世界と化した幻想郷は一刻も早く以前の環境を取り戻す必要に迫られた。
だがそうはいかなった。流星群による天変地異に乗じて、幻想郷の理の外側から来訪した者たちが、北に聳える妖怪の山とそれに連なる山脈の向こう側に棲みつき始めた。その土地は「マガノ国」と呼ばれ、彼らは絶えず幻想郷へ侵入を試みると同時に、襲撃を繰り返した。
土地は死に、住まう妖怪たちの少なくなった幻想郷の勢力ではマガノ国へ対抗することができず、流星群があった日から1年が経過したころ、幻想郷はマガノ国の支配下に置かれた。
マガノ国の頂点に立つ存在、通称「禍王」と呼ばれる者は歯向かう幻想郷の民を人間妖怪問わずマガノ国へと連れていき、奴隷としての烙印を押した。禍王の正体を探ろうとする者たちもおり、彼らは「外の世界からやってきた魔王」や「地球外生命体」であると推測するが、彼らもマガノ国がもたらす闇に?み込まれた。
土地は荒廃したまま一向に実らず、マガノ国の手の者が蔓延り、人々は常に恐怖と貧困に囚われながら生活する。最早、楽園と呼ばれていたころの面影は全くない。幻想郷は荒廃しきった、魔の世界と成り果ててしまったのだ。

流星群から5年後。
暗く曇った空の下、博麗霊夢は斧を背負って寂れたあぜ道を歩いていた。足元には、白い毛並みを持つ狐のような生き物がテクテクと後をついてきている。

「ねぇシロ、今回の妖怪を倒したら味噌と米くれるってさ」
　左目は傷を負って閉じており、右足首が曲がらないので歩き方も少し不安定。右手の人差し指と中指は中間程から千切れて無くなっている。
「キョン！」
「わかってるって。そしたらこの間もらった綺麗な水を使って炊いて食べましょう」
「キョンキョン！」
　キョンキョン鳴く白い狐は眠たそうに瞼の垂れた大きな目をし、青白い毛並みの一本の尻尾は体の大きさよりもずっと長く、爬虫類の尾のようにニョロニョロと揺れている。
「いたいた。さぁ、いくわよシロ！」
「キョン！」

「なんでだ…なんでお前が、奴らの味方をしてる？」
　目の前で倒れ伏した妖怪は、青い血だまりの中で血反吐を吐き出しながらそう呟いた。人間のような痩せ細った赤い肌の身体に、両目の飛び出した猫のような頭を持ったその妖怪。喉元を斧で切り裂かれ、頭部にも抉るような深い裂傷、体には火傷の跡がある。
「みんな噂している。博麗霊夢は幻想郷を見捨てたクズ巫女だ。マガノ国のいう事を聞いて妖怪を殺し、食糧をもらって――――」
「ごめんね」
　霊夢はそれだけ言い残すと斧を振り下ろし、妖怪の首を切り落とす。
　頭部があぜ道を転がり、乾いた土だけが残された畑へ落ちていく。やがて妖怪の身体はぶよぶよとその場で溶け始めた。
「よくやった博麗霊夢」
　後ろから拍手をしながら声をかけてきたのは、灰色の軍服を纏った背の高い男。
「憲兵さん、どうも」
「約束の報酬だ、受け取れ」

男は霊夢に飯盒に入った味噌と紙に包まれた一握りの米を手渡した。
「これは有難い」
「次も頼むぞ。我々、マガノ国の為に妖怪のいない平和な土地にしてくれ」
男は立ち去った。霊夢は真顔でそれを見届けると、シロを連れて帰路へ着く。
霊夢は人里の大通りへ入り、背中を丸めて食料を大事に抱えながら歩く。行き交う人々は誰もが貧しい身なりで痩せているか不健康に太っているかのどちらかだ。その人々は、こぞって顔をしかめ、霊夢を睨んでいる。
「おいお前！今日は何をもらったんだ！」
通行人から怒鳴られ、霊夢は少しだけ歩みを止めるも、足早に歩き出す。シロも心配そうに霊夢の顔を見上げながら後をついていく。
「幻想郷のために戦ってきた妖怪を殺して、奴らからもらう飯がうまいか!?」
「…すみません」
口々に霊夢を罵倒する里の住人達。霊夢は伏目で彼らを一望する。皆の顔に浮かぶのは、怒りと…そして、〝憎しみ〟、〝絶望〟。
その中で、道端に置かれた樽の上に座って煙草を咥えながらこちらを睨んでいる、上背の大きな女性と目が合った。が、霊夢は再び下を向き、そそくさとその場を離れようとする。
「はやく帰れ！売女め！」
通行人たちは下を向いて歩く霊夢に向かって石やゴミを投げつけ、頭や背中にコツコツと当たる。シロが牙をむき出して唸るが…
「シロ、だめ」
霊夢はそれを制し、この道をひたすらに進んだ先にある博麗神社へ向けて帰還するのだった。
「ウマそ～、いただきま～す」
「キョン！」

外れた障子、畳の?がれた床、折れた片足を補強してある机と、囲炉裏。神社のすぐ横にある家で、霊夢とシロは食卓を囲んでいた。
割れた茶碗に盛られたわずかな玄米と焼いた味噌。同じ量の同じものがシロの目の前にも置かれている。香ばしい香りが鼻をつき、霊夢はよく味わうようにゆっくりとそれを食べた。
「ごちそうさまでした。おいしかった〜」
「キョン!」
同じく完食したシロを撫でながら、霊夢は少し昔の事を思い出す。

――3年前
マガノ国から攻め来る軍勢は次第に増え続け、やがては幻想郷とマガノ国の全面対決に発展した。北から攻め入るマガノ国軍を、妖怪の山で迎え撃った。
もちろんその迎撃戦には霊夢もいた。必死に戦っていた。幻想郷を守る要として、外来の侵略者に決して負けぬよう、流星群の日からこれまでに蹂躙されてきた分をやり返すかの如く、彼らに対する〝憎しみ〟の炎を胸に灯して。
一通り軍勢を止めた後、霊夢は烈火の如き勢いで妖怪の山を乗り越え、敵の本拠地マガノ国へ乗り込んだ。妖怪たちは霊夢へ希望を託した。これまでに幾多もの異変を解決してきた霊夢であれば、きっとマガノ国を叩き潰して幻想郷へ帰ってくると。
丸1週間が経過したころ、霊夢は帰ってきた。妖怪たちは喜んで出迎えたが…霊夢が彼らに与えたものは、他ならぬ霊夢による暴力だった。
霊夢は近寄る妖怪を圧倒的な力で吹き飛ばし、博麗神社へ帰還し、何日も引きこもった。その間にマガノ国軍は再び幻想郷を攻め入り、ついに陥落させたのだった。
「…クソっ、なんでこんなことに…」
霊夢は自室の隅に蹲り、前髪を掴みながら震える声でそう呟いた。外からは里から押し寄せてきた人間たちの抗議の声がやかましく聞こえてくる。神社の周りに結界を張っているのでそれ以上入ってく

ることはないが、口々に霊夢を罵倒しているのがわかる。
彼らは一様にまったく知らされていないのだ。霊夢が怒りと憎しみと共にカチコんだマガノ国で何を見たのかを…。
霊夢は悔しさのあまり、頬に涙の筋を流した。己の無力が憎い、敵が憎い、聞こえてくる声が憎い。腹の底から煮え立つ怒りはいずれ霊夢の心全てを焼き尽くし、灰と化す。その時に、霊夢は自らの命の灯を消してしまわねかねない程の狂気に憑りつかれるのは明白だった。
「キョ…」
その時、すぐ近くで何か動物の鳴き声のような音が聞こえた。霊夢は顔を上げ、その方を見る。すると、そこには青白い毛並みを持つ不思議な狐のような生き物がじっと座ってこちらを睨んでいた。大きな目をじとっと細めて、赤い瞳で見つめてくる。
「何よアンタ…どこから入ってきたの？結界で神社の中には入れないはずなのに…」
考えられるとすれば、もともとこの神社のどこかに潜んでいたくらいか。
「って、あっ!?」
霊夢が少し目を離した隙に、その狐のような生き物は霊夢が用意していた焼き魚を頭からボリボリと噛み砕いて食べ始めていた。
「コラ!!それは私が何日も粘ってやっと捕まえた魚なのよ！それを…」
目の前にあるのは、数匹の魚、薄い味噌汁と漬物。それらを見た瞬間、霊夢の腹が鳴った。その時にはすでに、霊夢は目の前の食事を夢中で頬張っていた。
「美味い…美味い…!!まずは…生きなきゃ…！」
薄味なはずの味噌汁と漬物がやけにしょっぱく水っぽい。おまけに視界が揺らいで前が見えない。
「キョン！」
その妙な狐の鳴き声だけが聞こえる。

――――

あの時、霊夢がマガノ国で見たものは誰にも話していない。ただ、皆が知っていることはある。それは、霊夢が妖怪を一匹退治するごとに、霊夢はマガノ国から食糧を分けてもらっているということだ。

現在の幻想郷は不作に悩まされている。作物は育たず、野生の草木も痩せ細り、それを食べる動物も少なく、狩猟に出ても動物を目にすることすら珍しい。

妖怪は霊夢を激しく蔑んだ。マガノ国を倒すために共に戦った妖怪たちを倒して僅かな食糧を得る霊夢を。人間たちは絶望した。マガノ国の兵士にへつらって施しを受ける霊夢を見て、もはや希望は何も残っちゃいないのだと。

「…腹減って眠れない…」

霊夢はシロを抱きしめながら呟いた。シロも眠っていなかったのか、キョンと鳴いた。

「よし決めた！今日見る夢！」

「キョン？」

「毎日白米と魚、それから味の濃い味噌汁食って…夜は毎日風呂に入る！それから…毎日宴会をやるんだ…浴びるほどお酒飲んで、みんなで朝まで騒いで…そう、みんなで…」

そう言ったところで、霊夢はようやく眠りについた。

…

「おい、起きろ。仕事だ、また俺たちに歯向かう妖怪が出た、出番だぞ」

「…はーい」

しばらく眠ったころ、丑三つ時に霊夢は呼び起され、眠い目をこすりながら毛布から出ると立ち上がる。

「夢くらい見させてほしいわね。行くわよシロ」

「キョン！」

霊夢は障子の戸を開け、外に置いてある草履を履こうと視線を下に移した。次の瞬間、太鼓のような音が響いたかと思うと、足元にいたシロが血を吐いていた。突然胸にズン、と何かがめり込んできた。

「え？」

背中へ突き抜けていった小さいものが部屋の中の壁に当たる。

さらに続けて、複数の方向から放たれる凶弾が霊夢の身体を何発も貫いた。目の前には、銃を構えるマガノ国の憲兵団たち。
霊夢は同じく銃弾を受けて血を流すシロを抱き抱えると、おぼつかない足取りで逃走を図ろうとする。
「無駄だ博麗霊夢。お前の役目はもう終わった。幻想郷の妖怪どもはもう十分減った…禍王様も大層お前の働きを評価している。だからこその、死だ！」
「がふ……！」
昼間、霊夢に米と味噌を渡した憲兵隊長が後ろから言葉を投げる。
「お前が心まで完全に禍王様に屈していないことは、あの方もわかっている。だから博麗霊夢の不満が爆発し、再びマガノ国に牙をむく前に死を与えろと仰られた」
茂みに潜んでいた憲兵たちが飛び出し、霊夢へ銃を向ける、咄嗟に背中を向け、シロを庇おうとする。しかし、襲い掛かる何発もの銃弾は霊夢を貫き、その胸の中のシロをも撃ち抜いた。
「…死体は空っぽの賽銭箱にでも突っ込んどけ」
隊長は霊夢の死を確認すると、部下に指示してシロごとその遺体を無理やり賽銭箱の中に詰め込んだ。箱の下部や板の割れ目から血が流れだし、周囲を赤く色付ける。

…今から5年前、幻想郷を襲った「流星群」。その威力は凄まじく、天変地異を起こして幻想郷の環境を大きく一変させてしまった。
同時に幻想郷の北側に出現した、謎の巨大勢力「マガノ国」。彼らは1年後、幻想郷へ侵略を開始しその魔の手は全土へ及んだ。
3年前、妖怪の山で起こった幻想郷とマガノ国軍との全面対決が起こるも幻想郷側は敗退。
流星群から4年後、つまり〝今〟より1年前に起こったこの出来事が、この物語の始まりである。

第二話　「ふたりの願い」

「んじゃあアンタの名前はシロね」
「キョン？」
「いいでしょ、真っ白いからシロ。よろしくねシロ！」
　霊夢はその白い狐の妖怪に「シロ」と名前を付けた。シロはキョトンとした顔でそれを聞いたが、数秒後には承諾するかのように一声鳴いた。
　霊夢の仕事は、マガノ国の憲兵の指定する妖怪を退治する事。対価として生活用品か食糧を受け取る。だがそれも決して腹が膨れる量ではない。
「いただきます」
　食事をとる時は、必ずシロにも同じものを同じ分だけ食べさせている。それはシロを特別視していたりとそういった理由ではなく、ただ霊夢にとってはそれが当たり前で、誰であろうと一緒に食卓を囲む以上同じものを出すのは当然だからだ。
　霊夢は遠からず近い未来のうちに自分は死ぬだろうと考えていた。不作に悩まされる幻想郷では誰でも栄養失調で命を落とす可能性が付いて回り、それは霊夢も例外ではない。現に霊夢が霊力の使用や空を飛ぶ能力さえも全く使えなくなっているのは、それだけが原因ではないだろうが、それでも、あるいは勘がそうだと告げているのかもしれない。
「シロ、もし私が死んだら…私の死体を食べてほしいの。そして腹いっぱいになったらたぶんドカンとすごい力がゲットできると思うから…そしたら、邪魔なもの全部ぶっ壊して自由に暮らしてほしい。私、アンタが大好きだから！」

――――

　博麗神社の賽銭箱の中へ無理やり押し込められた霊夢の死体に、白い毛が巻き付いていく。霊夢と一緒に銃で撃たれたシロは辛うじて生きており、最後の力を使って霊夢の体を食べていた。

どんどんと伸びるシロの毛が霊夢の全身を包み込み、純白の繭を形作る。

「…シロ」

霊夢は、夢の中にいた。仰向けに寝転がっている自分の胸の上で座ってるシロを見上げ、笑顔で声をかける。

「私の死体、ちゃんと食べれた？」

それに対してシロは少しだけ笑って見せ、ゆっくりと口を開く。

「…我は、霊夢と共にとる食事が好きだった。我の腹が満たされる時は、お前の腹も満たされる時だ」

霊夢は驚いて目を見開く。

「お前の願いは我の願い。美味いものを食らうのも邪魔なもの全部ぶっ壊すのも…お前の夢を、共に叶えさせてくれ」

「シロッ…!?」

霊夢は賽銭箱を内側から突き破って立ち上がり、目の前の虚空へ手を伸ばす。だが何も掴むことができず、我に返った。

服は血だらけのままだが、撃たれた傷は跡形も無く治っている。さらに、目や指、足首の以前から怪我を負っていた部分も全く違和感なく元に戻っていた。

「そっか…」

胸の服を握りしめる。うっすらと滲んでくる涙をこらえ、顔を上げると一歩踏み出す。

「いこうよ、シロ」

「しかし分隊長…本当にあの巫女を殺しても良かったので？あのまま首輪をつけて飼い慣らしておけばまだ使えると思っていたのですが

…」
　副官らしき隊員が、先ほど霊夢を襲撃した分隊長にそう言った。
「まあ全て禍王様の思し召しだ。あの巫女は従順なように見えるが、我々がヤツに妖怪を殺させる度…ヤツの抱える叛逆の火は大きくなり続ける。ヤツの性格上、永遠にそれを堪えられるタマではない…いずれは爆発し、喉元に食らいつかれるのは我々だ。だからこれ以上火が大きくなる前に消したまで。その火が周りの者へ燃え広がっていくのもごめんだからな。以前からヤツに渡す食糧には少量ずつの毒を盛っていた。今夜手を下さずとも、あと数か月の内には死んでいただろうがな」
「なるほど。ではあの巫女に憑りついていた妖怪は何だったのでしょうか」
「今までは巫女に寄生する有象無象の妖獣だと思っていたが…禍王様はそうは考えていなかったらしい。何かに気付いた様子であの妖獣の始末もついでに頼まれた。詮索はしない方がいいぞ」
「は、はい…。おや？」
　副官は前方に何かを発見し、同じくそれに気付いた分隊長も腕を上げて部下たちを制止させる。
「へえー！なんだそういうわけかぁー！」
　目の前の木にもたれかかって腕を組み、こちらを笑顔で見ていたのは、先ほど銃で撃ち殺したはずの博麗霊夢だった。服は血だらけで汚れているが、外傷ひとつ見受けられない。
「おいお前ら…！本当に巫女が死んだのを確認したんだろうな」
「はいもちろん…！２０発は撃ち込まれてましたし、脈も止まってました！完全に死んでましたよソイツ！」
　焦り始める憲兵たち。
「では妖獣の方は？」
「…あの程度の雑魚妖怪ならじきに死ぬと思ったのですが…！」
「ポンコツども…！」
　分隊長は妖獣の死をまともに確認しなかった部下たちに小声で悪態を吐く。その間にも、霊夢はゆっくりとこちらへ近づいてきてい

る。
「アンタら勘違いしてたのね？マガノ国は妖怪たちに勝って…それに加えて私があまりに簡単に妖怪を倒すものだから…取るに足らない虫けらだと思っちまったのね？」
「もう一度撃ち殺せ!!」
憲兵たちはそれぞれ銃を構え、一斉に発射して霊夢を無数に撃ち抜く。鮮血が飛び散り、霊夢の体が後ろへ倒れていく。
「バカだなぁ…いつの時代も本当に厄介で、人間の想像を越えて暴れるのは妖怪なのよ」
「頭を撃って脳味噌を粉々にしろ！」
憲兵が霊夢の額目がけて最後の銃弾を発砲する。
（コイツらバカだなぁ…んでもバカなおかげでシロは最後の力を私に分けてくれた。どうして？そんなにいつものご飯が嬉しかったの？美味しかったの？あんなに少ないご飯で？毒の入った食べ物が？だったら、いつかもっと美味しいご飯を食べさせてあげる、お酒だって呑もう。だから…）
「私たちの邪魔ァするなら、死ね!!」
霊夢はそう叫ぶとともに大口を開け、鮫のように鋭い牙が生え揃った顎を噛み降ろす。すると、牙の間には額目がけて放たれた弾丸が挟まり、煙を上げながら潰れていた。
「なに!?」
憲兵たちが驚きながら見ている前で、霊夢の姿は変貌する。
黒髪は白く染まるとともに地面に付くほど長くなり、後ろへ靡く。赤く染まった獣のように鋭い瞳と口から覗く牙が月光を受けて輝き、噛み潰した弾丸を吐いて捨てる。強張った両手の指先はナイフのように鋭い爪が生え、腰からはシロの尾とそっくりな獣の尻尾が伸びる。
まるでシロをモデルとした獣のように変化した霊夢は、牙を剥いて唸りながら憲兵たちへ向き直る。今しがた撃たれた跡もほとんど消えている。
「なんだコイツ…！」

「いいから撃ちまくれ！流石に全身ハチの巣にすりゃ死ぬだろ…！」
分隊長も携帯していた装備パーツをくみ上げ、マシンガンを手に取るとそれを霊夢に向かって乱射する。しかし、目の前から霊夢の姿が消えた、僅かな土埃と風を残して。
憲兵たちが不思議に思った次の瞬間、霊夢はひとりの憲兵の背後に現れ、強張った手を振り下ろした。
サクッ
5本のナイフに斬り裂かれた憲兵の体はいとも容易くバラバラになった。
「うお…！」
隣の憲兵は思わず声を上げた。
「そうか、ひらめいたわ…もし私が勝ったら！全員で宴会をやるわ！」
「な、何言ってやがる…？」
霊夢はそう言った憲兵を切り裂いて殺し、次の標的へ顔を向ける。
「そこら中の美味いものと酒ェかき集めてさぁ！あ、もしもどうしてもって言うなら、禍王も宴会に入れてやってもいいよ！」
「はぁ!?」
またひとり、物言わぬ肉塊へと変える。
「その代わり私含めた全員に酒を注ぐ係にしてやる！そんでもって良い感じにみんな酔っぱらったら、今度は吐くまで飲ませてやってさ！アッハハッハハハハハ!!禍王のゲロ吐くとこ見て宴会はバカ盛り上がり！完璧な宴会プラン思いついちゃった～～～!!」
「何言ってんだコイツ！頭おかしいぞ！」
純白の尾を振り下ろして先端を憲兵の脳天から突き刺し、さらに薙ぎ払って何人も一度にグシャっと果物のように叩き潰す。
そして、副官だった憲兵の頭を掴むと胴体から背骨ごと引っこ抜き、それを投げ捨てる。数分前まで憲兵隊だった赤黒い塊がそこら中に点在する死屍累々な空間で、霊夢はゆっくりと分隊長に向き直る。
「おっ、お前！博麗霊夢！そんなに酒が飲みたいならくれてやる！いつも世話になってたからなぁ…！それくらいの奮発は…」
「うるさい！」

霊夢の突き出した尻尾の先端が分隊長の胸に突き刺さり、貫いた。そのままその体を持ち上げ、自分の目の前へ引き寄せる。
「毒入りの食べ物くれてた礼がまだだったわね？」
「お、お前、気付いて…」
「消毒しなきゃ」
霊夢の口から火の粉が燻った次の瞬間、大きく開いた口から特大の青い火炎が噴き出し、分隊長の全身を包み込んだ。数秒後には霊夢の尻尾の先には何も残っておらず、焦げた匂いが漂っているだけだった。
「いい気分…正月元旦の朝に顔洗ったあとみたい」
霊夢の晴れ晴れとした気分を現すかのように朝日が照る。同時に、霊夢は北に聳える妖怪の山とそれに連なる東西の山脈を睨んだ。あの向こうには諸悪の根源、マガノ国が存在し、その頂点に立つ禍王がふんぞり返っている。
「いくわよシロ、叛逆の時はきたわ」

第三話　「反逆の鐘」

マガノ国とは、流星群が起こった日以降、幻想郷の北側…妖怪の山の向こう側に出現した侵略者たちの本拠地である。マガノ国へ乗り込んだ、あるいは連行されていった者たちは妖怪か人間か問わず誰も戻ってきた事はない。知られている限り、博麗霊夢ただひとりを除いては。

マガノ国の頂点に君臨する「禍王」は妖怪たちとの戦争に勝利した後、幻想郷へ兵士や怪物を送り込み続けた。兵士たちは多彩な武装と数に物を言わせ、妖怪がほとんどいなくなった幻想郷を制圧し、禍王は幻想郷を支配下に収めた。

主に人間の里に駐在する兵士は「憲兵」と呼ばれ、また幻想郷各地に拠点を置いてそこを根城とし、周辺の巡回を行う兵士は「調査兵」と呼ばれ、憲兵は人里の監視と警備を、調査兵は幻想郷各地で反乱分子との戦いに備えている。

かつて霊夢は自ら乗り込んでいったマガノ国で「何か」を目の当たりにし、帰還した後は憲兵の指示のもと妖怪を退治し、僅かな対価を貰う生活を送っていたが、共に暮らしていた狐の妖獣「シロ」と共に憲兵に殺害される。

しかしシロだけは辛うじて生存しており、彼女を食べることで一体化し、霊夢を蘇らせた。そして今までこき使ってきた憲兵をすべて殺害したのが昨夜のことだ。

「さて、まだ禍王の奴には私の叛逆はバレてないと思うんだけど…やっちまった以上、最後までやり通すしかないわね」

霊夢が夢の中でシロの願いを聞いた瞬間から、最終的な目標は決まっていた。後は、その目標へ向けて戦い続けるのみ。

「んまあでも…いきなりマガノ国へ乗り込むって訳にはいかないのよね。まずは先にやるべきことをやってからじゃないとね」

人里へ降りた霊夢は、堂々とした足取りで大通りを歩く。道行く人々は相変わらず霊夢を怪訝な顔で睨みつけているが、昨日までと異

なり堂々とした佇まいで、何か雰囲気の変わったような気のする霊夢に対して誰も何も言わなかった。
「ああ、誰かと思えば霊夢じゃないか」
が、ひとりだけ霊夢に声をかけるものがいた。
「…魔理沙。何か用？」
霧雨魔理沙。幻想郷に住まう人間の魔法使いにして、流星群が起こる以前には霊夢と並んで幻想郷の危機や異変に立ち向かっていた少女。
魔理沙は商店の屋根の上から霊夢を指差し、さらに続ける。
「いつもの白いやつはどうした？まさか殺したのか？今じゃお前はマガノ国のために妖怪を殺して、奴らにへつらってるんだからな」
だが、霊夢は何ともないような顔でそれを聞き流し、先を急ごうとそっぽを向く。
「悪いわね、シロはもういないわ」
「え…？おい、待てよ！ならどこへ行く？もう霊力も使えない、空も飛べないお前はいつも武器を背負ってたよな？そんな丸腰でどこへ行くつもりなんだよ？ええ？おい！」
「おなかいっぱい食べに行くつもり」
霊夢は振り返ってそう言うと、今度こそこの場を後にした。魔理沙は屋根から飛び降りると、その後姿を遠目に見ながらぼそりとつぶやく。
「…ふん、今のお前に何ができるってんだよ」

霊夢の目的地とは、人間の里のど真ん中に建てられているマガノ国の駐屯基地だった。コンクリートで出来たその基地は巨大で、敷地との境界には電柵が張り巡らされており、武器等を生産する工場も兼ねているためか絶えず黒煙を吐き出し、里の水路は汚染され、土壌も有害な物質が染みこんでしまっている。とてもではないが、この里に誰もが自由に使える綺麗な水は一切存在しない。
そのため、生活するために必要な水はすべてマガノ国から配給されるものか、買い取ったものでないと安心して使う事すらできない。家

畜や作物を育てるにも水は大量に必要であり、その結果、人々は常に貧しい暮らしを強いられているのだ。
基地にたどり着いた霊夢は、早速その門の前に立った。霊夢がここへ来た目的は、当然この基地を壊滅させ、里が汚染される原因を取り除くことだ。
「よっと…」
霊夢は門に手をかけ、押して開こうと力を込める。門は思ったよりも重く、さらに踏ん張る霊夢だが…次の瞬間、不意に何者かに声をかけられて動きを止めた。
「そこで何してんだテメェ」
「誰?アンタ」
いつの間にか後ろに立っていたのは、背の高い女性だった。茶色い髪を肩のあたりまで伸ばし、目つきは鋭く凶悪な面構えをしている。白いタンクトップのシャツとジーンズを身に纏い、その上から茶色い革のジャケットを羽織り、口には煙草を咥えている。
「アタシは新子(にいこ)ってモンだ。一度くらい顔を見たことあるだろ?こうして喋ったのは初めてだがな」
「…あ、そう。私はちょっとおなかが減ってねぇ…ちょっと食べ物を食わせてもらおうかとしてるとこなの」
「ハハッ、面白れぇこと言いやがるが…博麗霊夢サンよ、馬鹿な真似してもらっちゃ困る。マガノ国の連中に手ぇ出せばどうなるかってことくらい知ってるはずだろ?そうなりゃまず割を食うのは、アタシらみてぇな普通の人間なんだよ。今まで奴らに楯突こうとした奴らは面倒ごと起こされる前に全員アタシらが叩きのめしてきた…そうすることで里の人間の命を守ってんだ。テメェなんざより、よっぽどな」
新子と名乗った女性は霊夢に歩み寄り、その顔を冷酷な表情で見下ろすと、咥えていた煙草の先端をその頬に押し付けた。熱がジリジリと霊夢の頬を焼いていくが、霊夢は全く表情を崩さずに新子を見つめ返している。
ドゴッ!

だが次の瞬間、霊夢は新子の頬をぶん殴った。新子はバランスを崩してよろめき、慌てて霊夢を睨み返した。
「テメェ…！」
新子はすぐさま霊夢の顔面を殴り返し、それを食らった霊夢も後ろへよろめいた。が、顔を上げた霊夢の頬には、ついさっき受けたはずの煙草による火傷の跡は既に薄くなって消えかけていた。
「何モンなんだ？テメェは…」
思わず驚いてそう声を漏らしてしまう新子。
その時、近くから怒鳴り声が聞こえてきた。
「貴様ら、そこで何をしてる!?」
門の向こう側から憲兵が数人でこちらへ迫っているのが見えた。手には銃を持ち、こちらを攻撃する気満々だ。
「チッ、テメェの所為で見つかっちまったじゃねぇか！」
「ハァ!?知らないわよ、アンタが絡んできたんでしょ！」
「しょうがねぇ、逃げるぞ！」
バチッ
憲兵が発砲した銃弾が足元の地面に突き刺さり、ふたりは動きを止める。そしてものの数秒で周囲を１０人程度の憲兵に囲まれてしまう。
「貴様ら何者だ？なぜここで騒いでいる？マガノ国に何か用か？」
隊長らしき憲兵が霊夢らにそう尋ねた。
「…博麗霊夢か、なぜここにいる？」
「別に～」
「何でもねぇよ…！騒いだのァ悪かった…すぐに帰るよ」
新子はすぐに頭を下げてそう言い、この場を逃れようとする。彼女の姿を見て何かに気付いた憲兵が隊長に耳打ちする。
「コイツは確か、里で行動しているゴロツキ共のボスです。騒ぎを起こすこともあるので度々我々に拘束されている…まあ我々に反抗しているわけではないのですぐに逃がしていますが…」
「そうか。確かにいつもならそうしてやってもいいが…今日は事情が違う。実は昨日、我々の部隊のひとつが行方不明になってな…今の話

を聞いて思ったんだが、貴様が犯人じゃないか？」
　隊長は新子を指差してそう言った。
「はァ!?なんでだよ…！」
「今我々に暴言を吐いたな？さらに先ほどからの反抗的な態度…この場で捕える理由としちゃ十分だ」
　憲兵たちは新子に近寄り、電気警棒を取り出して振りかざす。新子も逃げるに逃げられず、そのまま焦ったように歯を噛み締めた。
　しかし…
「ヴォゲぇ!!??」
　次の瞬間、憲兵たちがまとめて吹き飛ばされ、背中から地面に倒れ込んだ。新子が驚いて横を見ると、霊夢が何食わぬ顔で拳を振り下ろしていた。
「貴様…！我々に歯向かったな!?それがどういう結果を呼ぶのかわかって…」
「うっさいわね」
　霊夢の一言が憲兵の言葉を遮った。
「あのね、私はもう何も考えないで黙って言う事聞くのはやめにしたの」
「なん…！」
「聞こえなかったならもう一度ハッキリ言うわ。私はもうアンタらの言いなりにはならない！禍王をぶっ倒して、マガノ国をこの幻想郷から追い出してやるわ!!」
　霊夢がそう言いながら再び憲兵を殴り倒すと、基地の中から怒声と共に増援部隊が続々と現れる。しかし、霊夢は押し寄せる何十人もの憲兵を相手に一切臆することなく足を前へ踏み出し、幻想郷史上最恐の敵へ宣戦布告し、立ち向かう。
「マジかよ…」
　新子は地面に膝をついたまま、恐れ知らずの霊夢の行動に驚愕すると同時に、高揚していた…。
　圧倒的な膂力でもって敵を薙ぎ払い、暴れまわる彼女の姿は、ここしばらくの間で新子たちがすっかり忘れ去ってしまっていた、〃理不

尽へ対する怒り〃を体現しているかのようだったからだ。

第四話「光臨」

マガノ国の兵士、その中でも人里に常駐し人々を統制する役目をおっている憲兵隊は、常に複数人の小隊で行動し、それぞれが大柄な体格を持ち、灰色の制服に身を包んでいる。腰には電気を放つ警棒と、背中にはライフル銃を携えている。彼らは隊ごとに若干の差異はあるが一様に兄弟のようにそっくりな体つきと顔をしており、顔に関しては眉上が隆起し、眉毛はなく、鼻が低く、人中の長い顔は類人猿を彷彿とさせる。

彼らが普通の人間とは違うことは誰が見てもわかる。彼らは里の人間は言わずもがな、多少の強さの妖怪であれば制圧できる強さを持ち、強大なマガノ国の一員である万能感に酔いしれていた。

しかし、それは今日を持って崩れ去ることとなる。

霊夢は襲い来る憲兵を次々と殴り飛ばし、鬼神が如き勢いで暴れまわる。マガノ国に使える兵士である憲兵は、普通の人間なら軽く制圧できる力と装備を持っているが、人数と武器によって我が物顔で幻想郷を闊歩する兵士であっても、博麗の巫女たる霊夢の膂力の前には及ばない。

「なんだあの巫女！今までの様子とまるで違うぞ!?」

尻込みした憲兵が叫ぶ。何十人とひしめいていた憲兵たちも、今では霊夢の攻撃によってノックダウンし、山のように積み重なっている。彼らが知っている博麗霊夢とは、いつも弱弱しく、？せていて、覇気がなく、辛気臭い雰囲気を纏ったうだつの上がらない女に過ぎなかった。しかし、今の霊夢はどうだろう。

これまでの弱弱しさは消え、まだ痩せてはいるもののその表情は自信に満ちており、今まで感じられなかった異様な覇気を纏っている。

「ええい、こうなったら…〃クログマ〃を連れてこい！」

「え!?」

ひとりの憲兵がそういうと、周りの者たちは驚いた声を上げる。

「いいのか…？あんな怪物を放ったら、俺たちもどうなるか…！」

「構わん！俺たちはヤツだけ外に出して基地に戻るんだよ！」
　霊夢は、気付いたら憲兵たちが一目散に基地の中へ退散している様子を目の当たりにした。
「なに…？急に逃げちゃって」
　困惑していると、新子が横で小さな声で言った。
「クログマ…だと…!?チッ、流石にまずい…おいアンタもずらかるぞ」
「え？なんで？」
「クログマっていやぁ、前に一度見かけたことがある！奴らが飼ってる猛獣だよ。だがただの動物じゃねぇ…マガノ国で改造されて暴れ狂うだけの殺戮マシーンに成り下がった化け物だ！」
　新子が焦りながらそう語った瞬間、基地の方から低くくぐもった獣の雄たけびが響いた。同時に聞こえる憲兵たちの怒号と、何かが持ち上がるゴゴゴ…という音。
「来るぞ」
　霊夢は真正面から基地を睨む。すると、開かれたシャッターの奥から巨大な影がのそりと姿を現した。それは鼻を嗅ぎ鳴らし、こちらに気付くと、二足で立ち上がり咆哮する。
「バオオオオオオオ!!」
　恐ろしい巨大な熊のような風貌の怪物が、その巨体に見合わぬスピードで駆けてくる。全身が漆黒の体毛に覆われているが、その腕と頭部だけ毛が抜け落ち、不気味で筋肉質な素肌を露わにしている。
「面白いじゃない！あんなのは見たことないわ」
「おいおい…まさかやるつもりじゃねぇだろうな!?アタシはああいうのを散々見てきたんだ、恐ろしさも知ってる…！」
「じゃあアンタは黙って見てなさい。いくわよ、シロ」
　霊夢はそれだけ呟くと、身を低く屈め、クラウチングスタートの姿勢を取る。さらに、霊夢の腰のあたりから純白の毛に覆われた尻尾のようなものが生え始める。
「テメェ、そりゃなんだ…？」
　困惑している新子を尻目に、霊夢は向かってくるクログマに対して走り出した。風になびく黒髪が白く染まって長くなり、目は紅く輝

き、口からはサメのように鋭く並んだ歯が覗く。
そしてさらに霊夢のスピードは高まり、全速力で疾走しているクログマと正面から激突した。
「バウウッ!?」
両者は勢いが止まって少し後ろへ下がる。クログマはすぐに立ち上がり、愚かにも接触してきた小さい人間を見下ろす。
異様なオーラを醸し出す霊夢は臆せず睨み返し、振り下ろされるクログマの腕による一撃を、こちらも手で防ごうとする。
「バカ!そんなことしても意味ねぇよ!腕ごと体がつぶれるぞ」
心配した新子が声を荒げる。
通常、山で遭遇するヒグマでさえ、人間を体を一撃でバラバラにする膂力を持っている。それの2倍以上の体躯を持ち、さらに発達した筋力、尖った鉄パイプのような爪…その威力は計り知れないだろう。
ガキンッ!
しかし、クログマの腕は鋼鉄にピッケルを振り下ろした時のように跳ね返された。
「な…!」
驚く新子。
反動で思わず後ろへ下がってしまうクログマだが、すぐに前のめりになり、素早い動作で霊夢の上へ覆いかぶさり、両腕で捕えつつ頭部を噛み砕こうと噛みついた。
「痛いわね」
が、ゴリゴリと音が鳴るだけで霊夢の体は折れも砕けもしなかった。霊夢はクログマの喉元の肉を掴み、下へと引っ張る。クログマの口が霊夢の頭から外れ、次の瞬間、その巨体が地面に叩き付けられた。
「マジか…!」
「バオオオオオ…!!」
クログマは頭を揺さぶりながら再度起き上がり、コケにされた怒りのままによだれをまき散らしながら両腕を上げて吠える。凄まじい声量と迫力に新子は思わず耳をふさぎ、基地の中へ逃げ込んだはずの憲兵も恐怖した。

しかし、クログマはハッと気付いて咆哮を止める。目の前にいるはずの霊夢がいない。
「悪いわね」
霊夢はクログマの頭上で片足を目いっぱいに振り上げていた。額から血の筋が流れているものの、それ以外はほとんどダメージも受けていない状態だった。
「動物だろうが誰だろうが、私とシロの邪魔するなら…消えて頂戴」
次の瞬間、巨大なハンマーを振り下ろしたが如き衝撃がクログマの脳天へ叩き付けられた。それは頑丈な頭蓋を打ち砕き、全身の髄まで振動が達し…クログマは顎を地面に叩き付けるように地に伏せ、舌を出したまま一切動かなくなった。
あたりを静寂が支配し、乾いた風が吹く音が鳴る。
「…お前、すげぇな…」
霊夢の戦いぶりを見ていた新子が呟いた。霊夢は、目を閉じて深呼吸すると髪の毛や尻尾、体の変化が元に戻ってゆく。
「その力は一体…？話にだけ聞いてる博麗の巫女の力…じゃあなさそうだぜ…」
「まあ…いろいろあったのよ」
「…そうか。って、おいおい…！」
霊夢と新子がそう会話していると、基地の中から残りの憲兵たちがやってくる。１０人もいない程の人数だが、それぞれが警棒や銃を構え、汗をかきながら少し怯えた様子でこちらを睨む。
「観念しろよ…！」
「クログマとの戦闘で弱っているはずだ、畳みかけるぞ…」
そうは言われるが、確かに霊夢は額から血を流してはいるが、それ以外に怪我もないし、そもこんなものは傷のうちに入らない。あと数分もすれば塞がって治癒するだろう。
「くそ、どうしたもんか…！」
新子も拳を握りながら焦った表情でつぶやく。霊夢はやれやれと小さくため息を吐くと、残りの憲兵を始末しようと腕を上げた…
ドン…

瞬間、どこか遠くの方で大きな音が鳴り、微かな振動が足元に届いた。何かを打ち上げる大砲のような音だった。
「なんだ…？」
憲兵たちも困惑し、辺りを見渡す。
ヒュルルルルル…
そして、続けて聞こえるのは何かが空を切って飛ぶ音だった。新子も上を見上げ、その空を飛んでいる何かを見ようとする。
だが、霊夢は緊張した顔で一点を見つめていた。さっきの音と振動の発生源は、北の妖怪の山のはるか向こう側からだった。そこは今や誰もが知っている…そう、マガノ国だった。
ドシャアアン！
高速で霊夢と新子の目の前に墜落してきた巨大な物体が地面へ衝突し、地面が揺れ、凄まじい衝撃と土を巻き上げる。その真下に居た憲兵たちは潰されて消し飛ばされていた。
「何なんだよ一体！」
「まさか…」
濛々と立ち込める土煙の奥で、大きな〝何か〟が、ゆっくりと穴の中から立ち上がる。それは一跨ぎで穴の縁を登り、霊夢と新子を見下ろす。
「クココココココ…」
それは喉から顫動音を鳴らし、薄くなっていく煙の中から姿を現す。普通の人間４人分ほどもある背丈とそれに見合う筋肉質な体格を持つ人型で、黒い袴を履き、上半身は両肩にベルトのようなものを巻いてあるだけ。そして、頭部には黒い金属製のヘルメットを被り、その顔を覆っている。
「…禍王!!」
霊夢は、倒すべき怨敵の名を叫んだ。

第五話　「絶対強者」

「禍王」とは、現在の幻想郷を支配するマガノ国の首魁であるとされる存在である。その正体は一切が謎に包まれており、真相を探ろうとした者は悉く居なくなった。

禍王は冷酷で狡猾、強大な力に加えて未知数の科学力をも持つとされ、侵略者マガノ国を率いており、幻想郷に住まう全ての者たちが怖れている。

「禍王……！」

その禍王が、霊夢と新子の目の前に突然降って現れた、

「禍王…だって…!?」

霊夢の発言とただならぬ様子から、新子はこの目の前にいる冗談のような巨体を誇り二足で直立した生物があの禍王であると信じざるを得なかった。

頸から胸、腹へかけてはクリーム色の滑らかな皮が覆い、腕や肩、背中といったそれ以外の部位は黒緑色のごつごつした鱗と甲殻に覆われており、その皮膚は内側の強靭な筋肉に押し上げられて隆起している。下半身には白い袴を履き、上半身は両肩にベルトを巻き、背中に何かを背負っている。

「クココココ…」

形容するなら、巨大な爬虫類人間。本や雑誌の挿絵でしか見たことがない恐竜という生物をそのまま人の形にしたようだが、頭を覆う黒い金属製のヘルメットや両腕に装着された電子機器がその原始的な容姿とアンバランスで不気味だった。

ふたりは禍王から発せられる覇気によって威圧され、その場からまんじりとも動くことができない。この恐怖は妖怪や幽霊と出くわした時のような未知に対する恐怖とは全く異なる、もっと身近なところからくるものだった。

（コイツが禍王…!?デカすぎんだろ…7メートルくらいはあるぞ！逃げようにも体が…）

新子は恐怖の中、どうやってこの危機を脱しようかと思考する。し

かし、まるでただ考えただけで目の前の禍王が動き出すような気がして、徐々に思考さえも手放そうとしてしまう。
「禍王オオォオオォオオ!!!」
しかし、耳に飛び込んできた霊夢の怒号を聞いて我に返る。
その瞬間、霊夢の渾身の拳が禍王の顔面へ叩きつけられていた。ミシミシ、グググ…と鈍い音が鳴り渡り、禍王の顔が横へ逸れ、霊夢がさらに力を込めると、禍王の巨体が後ずさった。
「な、なにやってんだテメェ…!」
勝てるはずのない敵への無謀な攻撃に、新子は驚いて霊夢に言葉を漏らす。しかし、当の霊夢はそうは思っていないようで、再び白い髪の荒々しい姿に変身し、もっと力を入れる。
すると、後ろへ反れていた禍王の巨体が弾き飛ばされ、その場で大の字に倒れ込んだ。ズシン、と振動が響く。
「アンタは…私が絶対に幻想郷から追い出してやる!!」
「おい博麗霊夢!禍王はこの図体だ…起き上がるのに少しかかるだろう…だから今のうちにずらかるぞ!」
「ずらかる…?そんなことしなくても、ここで倒せばいいハナシでしょ!!」
そう話している間に、禍王は首をかしげながらゆっくりと起き上がる。
「クココココ…」
そして喉を鳴らしながらあたりを見渡して霊夢の姿を探し、その姿をとらえた瞬間…
再び勢いよく飛び出した霊夢の蹴りが、禍王の顎を蹴り上げた。ガン、と音が鳴り、霊夢はナイフのように長く鋭くなった爪のついた手を振り下ろし、禍王の胸を切り裂く。
ガリッ…
(堅い…!?)
しかし、憲兵を何の抵抗もなく切り裂くほどの強度と切れ味の爪が禍王の胸、それも白く軟そうな部分の皮膚に少しも傷つけることがないまま、逆に爪の方が弾かれる。

今度は腰から伸びる太く長大な尾を大きく振り回し、殴打の一撃を叩きつける。そして口元へ青い火炎を溜め込み、一気に放出して禍王を包み込んだ。
霊夢はこれでもかと勢いよく火炎を吐き出し続け、あたりには凄まじい熱風が吹き、新子はあまりの熱さに思わず顔を背けた。
「クココ…」
が、霊夢は感じていた。自分が放つ火炎の中に囚われる禍王であったが、その体には少しも火が通っておらず、すり抜けるように無効化されている、と。
霊夢は炎を吐くのをやめ、息を切らしながら一旦距離を取り、再び顔面へ拳をぶつける。続けて一発、もう一発と息をつかせぬ怒涛の連続攻撃を浴びせていく。
「うおおおおおお!!」
幻想郷を蹂躙された怒り、人々に対する仕打ち、そしてシロと自分を殺そうとしたことへ対する憎しみを秘めて猛攻を繰り出し続ける霊夢。
しかし、それらをすべて受けながらも、禍王はそれ以上は決して足を動かすことはなかった。背中に背負った銀色の物体から何かが伸び、右肩の上から顔を出す。それは武骨な砲身を備えた銃のようで…
「何かやべぇ…!おい離れろ!」
新子が叫ぶも間に合わず、次の瞬間に禍王の砲身から発射された青く輝くエネルギー球が霊夢の胸へ直撃した。
霊夢は強烈な衝撃に全身を襲われ、一瞬で白目をむいて意識を失い、枯葉のように無茶苦茶に回転しながら吹っ飛ばされ、頭から地面へと滑り込み、倒れた。
「クココココココ…」
禍王は喉を鳴らし、伸ばした砲身を収納する。
「博麗の巫女に…白面の妖怪の力が加わったのか。だがしかし、難儀なものだな…弱いってのは!」
はっきりと意味を持って理解できる言葉で禍王はそう発し、無様な姿で気絶している霊夢を見下ろす。そして数歩で彼女の元まで歩み

寄ると、丸太のような太い腕を伸ばす。
　禍王は新子のことなど目にもくれず、その辺に転がる葉っぱや石ころのようにちっとも意識していない。が、新子はその場で息を殺して身じろぎひとつせず、目の前で起こるであろう光景を眺める。
　恐らく、禍王は霊夢をこの場で殺害するか、マガノ国へ連れて帰るか、そのどちらかを行うだろう。マガノ国へ連れて行かれれば、それは実質死んだも同然かそれ以上に悲惨な末路で、それは新子自身が身をもってよくわかっている。
（バカなのはアイツだ…禍王が直接ここへ来るなんて思いもしなかったが、それよりも絶対にケンカを売っちゃいけねぇヤツに無謀にも挑んじまったのはアイツだ…！なにもアタシがどうこうしてやる義理はねぇよな!?何しろアイツのせいだもんな…）
　そう考える間にも、禍王の魔の手が霊夢へ忍び寄る。
「待て！」
　だが、そう考える新子の脳裏とは裏腹に、口から出たのは禍王を制する言葉だった。
　自分ながら信じられないと言った様子で自分の口をふさぐ新子だったが、禍王はぐるりと顔をこちらへ向け、腕を引っ込めて彼女の方へ向き直る。
「なんぞ?貴様、今この己に命令したか?『待て』、と…」
　同時に全身を突き刺した更なる覇気。その瞬間に湧き上がる〝死〟のイメージ。
「…ああ、言ったがそれがどうしたァ!?」
　しかし、それが逆に新子の逆鱗に触れた！恐怖によって失われていた彼女の生存本能が揺れ動き、爆発的な闘志を生み出したのだ！
（禍王に敵意を向けられた以上、どちらにせよアタシは死ぬ！こうなりゃヤケになってやるぜ…）
　新子は首にネックレスのようにぶら下げていた銀色の金属のアクセサリーを外し、手に持つと、なんどそれは煙と共に巨大化し、一本の金棒となった！
「なに…?」

霊夢よりも頭一つ分以上背の高い新子よりも巨大な金棒は中腹から先端部へかけて黒い半球状の突起が並んだ形状だ。新子は重さにして1トン以上は確実なサイズの金棒を簡単に腕力で持ち上げ、それを振り上げたまま高く跳躍する。
「〝カンダチ〟!!」
そして金棒による一撃が、禍王の脳天へさく裂した。
ズドゴォ!!
凄まじい音と波動が周囲に発生し、禍王の体が硬直する。新子はまるで地の底にまで根を伸ばす大木を殴ったような反動に襲われ、後ろへ仰け反った。が、もう一度前へ飛びだし、腹へと金棒のフルスイングを叩き込む。
ズムッ…!
「…ガフッ!」
金棒が深くめり込んだ時、禍王は咳込んだ。そしてよろよろと後ろへ下がり、腹を押さえて喉を鳴らす。
「な、ナメんなコラ…!」
「クココココ…痛てぇな…!さっきの巫女とは段違いの威力の攻撃…ウグ…!キサマは相当強いだろう、部下に欲しいくらいだ」
確かに、霊夢のとは違って新子の攻撃は禍王に届き、ダメージを負わせた。だがそれだけのことだった。いくら痛かったとはいえ、禍王自身の生命には何の関わりもない痛みでしかなかった。
「なぜキサマほどの人間がこんな場所に燻っていたのかはわからないが…良いものを見せてもらった。その礼として、キサマらは殺さないでおいてやる」
禍王はスッと姿勢を直し、4本指の右手で頭部のヘルメットを掴んだ。左手でヘルメットと頭部を結合していた金具を外し、いよいよヘルメットを脱ぐ。
内側から激しい蒸気が立ち込め、息でそれを吹き飛ばしたことで露わになった禍王の素顔。それはとても地球上の生物だとは思えぬ様相を呈していた。
「禍王…テメェは一体…なんなんだ?」

一言で表すなら、その頭部はタコのようだった。距離の離れた小さな両目、額から上は大きく広がっており、目玉のような模様が走っている。人間でいう頬と口にあたる部分からは2本ずつの触手が垂れ下がり、顎の下からも伸びる触手は上方へ向いて折りたたまれている。

「クココココココ…!!ああ、知らない方がいいこともあるだろう。知りたくばこの己を打ち破って見せろ！これより数多もの刺客がキサマらふたりのもとへ送られるだろう！それらを躱しながら、この己の企みを全て破壊してみろ！それまで己は逃げも隠れもせん、己の指示でキサマら以外に手を上げたり、人質にすることも無い！己はマガノ国にて待つ！…巫女にもそう伝えておけ」

禍王はそう言い切ると、顔の計6本の触手を展開し、その奥に隠されていた口を開けた。口の中からは4本の独立して稼働する牙が露出しており、その牙も昆虫の腕のように固く節があり、口の四方から外側へ伸びることで口を広げさらに内側にある細かな歯を見せた。

(何なんだコイツは…!?)

知っているどの生物とも合致しない禍王の姿を見て、尽きることなく次から次へと溢れ出してくる疑問が頭の中を埋め尽くし、それらは統合されて恐怖へと変換されていく。

「その必要は…ないわ…」

が、近くから聞こえたその声が恐怖を払う。霊夢が目を覚まし、一撃でボロボロになった体を奮い立たせてなんとか立ち上がろうとしていた。

「お前…！」

「だから…今ここでアンタを倒せばいい話でしょうが…！私はここで…アンタが去るのを黙って見過ごす意味はないわ！」

「ほう…あくまで己をこの場で倒したいのか。ならば、いいだろう…絶対的な絶望をくれてやる」

そう言った禍王に対し、霊夢は構えると、再びシロの力を得た白髪の姿へと変貌する。

圧倒的な戦闘能力を誇る禍王に対し、霊夢はここで勝利をおさめる

ことができるのだろうか…？

第六話「獣の槍」

これまで決して表舞台には姿を現さず、一切が謎に包まれていた禍王が突如として霊夢たちの目の前に現れ、圧倒的な威圧感と存在感を放っている。

禍王へ対してありったけの憎しみを込めた連続攻撃を叩き込んでもビクともされず、逆に一撃で完封された霊夢であったが、今目を覚まし、再び禍王と相まみえている。

霊夢の髪は白く染まって長くなり、後ろへ靡く。目つきが獣のように鋭くなり、口からは鋭い無数の牙が覗き、両手の爪はナイフのように鋭く伸びた。腰からはシロのものを彷彿とさせる白い毛に覆われた太く長大な尾が生える。

「やはりそれが…白面の妖怪を取り込んだキサマの姿か」

変貌した霊夢の姿を見た禍王はそう言った。

「そうよ…シロはアンタらに殺された…！でも最後の力を私に分けてくれた！」

シロは禍王の命令を受けた憲兵隊によって銃撃を受け、瀕死になった自分の力を霊夢に与えた。

「殺されただと？クココココ…バカを言え、まだ白面の妖怪はキサマの体内で生きている。その姿が証拠だろう！加えて今のキサマの能力全てがそれに起因するものだ…キサマは妖怪に憑りつかれたのだ」

「シロが…？」

「キサマが曲がりなりにも博麗の巫女であったからこそ、その力に？まれることなく自在に扱うことが出来ている…白面の妖怪はそれを信じていたからこそ、力を与えたのだろうな」

禍王の言葉が真実かどうかはわからない。しかし、霊夢はその言葉を聞いて心のどこかで安堵していた。シロは私のことを信じている。

「だが、それはそれだろ？」

と、禍王は続ける。

「己は己の野望のために、この幻想郷の大地を我が物とする！恐怖で支配した人間や妖怪どもは労働力として死ぬまで使ってやる！キサ

マはこの己を倒したいんだろ？ならば力を示せ」
　禍王は自分へ向けて親指を立て、霊夢を挑発する。
「ええ、そうするわ！」
　霊夢は素早く駆け出し、禍王の頭目がけて飛び蹴りを仕掛ける。禍王はそれを額で受けてもビクともせず、頭突きではじき返す。霊夢はすぐさま地面を滑りながら背後へ回り、向う脛へとローキック。
　だが、やはり禍王はそれをノーガードで受けても何も感じていないかのように無反応だった。
（全くのノーダメージ！なんで!?）
　再び禍王へ爪を振り下ろし、青い炎を吐きつけ、尾による殴打を加えても、禍王は無傷。それどころか体を少しも動かすことすらない。
（今まではこの力の込め方で妖怪を退治してきたのに…！確かに私の攻撃はコイツに確実に届いているのに…なんで一切効いている気がしないのよ…!?）
　霊夢渾身の蹴りが禍王の鳩尾へ突き刺さる。が、それは一瞬で禍王の強靭な筋肉や皮膚に押し返され、弾き飛ばされる。霊夢は息を切らしながら両手を地面についた姿勢で禍王を睨む。
「キサマは…一体何であるつもりでいるんだ？」
　禍王は一歩踏み出す。戦いを見ていただけの新子ですらもたったそれだけの動作によって放たれた覇気に圧倒され、霊夢は火炎を吐いて迎撃しようとする。
　ガシッ
　が、炎の中からヌッと飛び出してきた禍王の剛腕が霊夢の顔面を掴む。霊夢の体は自らの意思に反して宙へ放り投げられ、視界が茶色い地面と白い空を交互に映し出す。
　霊夢はなんとか地面へ受け身を取って着地し、顔を上げた瞬間、目の前には禍王の不気味な顔が近付けられていた。
「キサマは何をやっている？」
　そして低い声で霊夢に問いかける。霊夢は答えることなく、禍王の額へ拳を叩き付けた。だが、ビクともしない。禍王はそれを気にも留めずに続ける。

「キサマは栄養失調と毒で弱り、その身の霊力はほとんどゼロだろう？そんな状態で霊力を使おうとしても何もならないぞ」
禍王は霊夢の腕をつかみ、そのまま立ち上がる。人間４人分ほどもある巨体に持ち上げられて宙ぶらりんにされた霊夢は成すすべなく再度投げ飛ばされる。今度は先ほどのように放り投げるという程度ではなく、高速で投擲されていた。
「…ッ!!」
「うおっ!?」
ブーメランのように回転しながらぶっ飛ばされる霊夢は新子の体の横スレスレを通過し、そのまま人間の里の中へと突入していく。
人々の頭上の上を霊夢が飛び越えていき、勢いが落ちてきたところで霊夢は大通りのど真ん中に爪を立てて着地する。
「なんだ?」
「なんで人が空から降ってくるんだ!?」
里の通行人たちが突然現れた霊夢に対して驚いた反応を示す。そうしている間にも、ヒュウウという風を切る音とともに頭上から影が降りてくる。
次の瞬間、禍王が人里の真ん中に降り立ち、大股で霊夢へ歩み寄る。
「うわあああ!?妖怪!?」
「いや、マガノ国の怪物だ！」
禍王の姿を見た人間たちは悲鳴を上げながら一目散に逃げ出す。流石に彼が禍王本人であるとは誰も思いもしなかったようだが、すぐにその場には人の気配がなくなった。
ドゴッ
すぐさま霊夢の容赦ない打撃が禍王の首筋へヒットする。
「…最強の妖怪の力を使っておいて、その程度の攻撃しかできないのか？」
禍王の大きな手が霊夢の白い髪を掴み、その身体を宙にぶら下げる。
「ぐ…！」
苦しげな声を出しながら、禍王の腕を掴んで逃れようとする霊夢。

だが、禍王は決して手を離さず、低い声で淡々と続ける。
「いいか?その姿となったキサマは…人間じゃあないんだぞ…!今のキサマは妖怪そのものになっている!妖怪には妖怪の戦い方が…力の出し方があるだろうが!!」
禍王は一喝と共に手を離し、落下し始めた霊夢が地面へぶつかるのをただ見ていた。
そう、禍王は霊夢と戦い始めてから最初のエネルギー球による一撃以外、まともに攻撃を加えていない。霊夢からの攻撃はノーガードで平然と受けるくせに自分からは何もしない。
霊夢は自分が歯牙にもかける価値のない、虫けら同然に扱われているようだと感じ、ふつふつと怒りが湧き上がってくる。しかし、それだけでは何も変わらないことも理解している。怒りや憎しみで現状をどうにかできるのならば、私は今こんな惨めな目に遭っていない!
「みっともねぇ話だな、宝の持ち腐れってやつか?どんな優れた得物を持ってようが使い手が何もわかっていなきゃゴミと一緒!お前の中のくだらぬ白面の妖怪も心底絶望しているだろう、何故自分はこの程度の…」
「お願い」
霊夢の静かな一言が禍王の言葉を遮る。
「黙って」
ビリ…
「…!!」
同時に、禍王の全身を覆った激しい悪寒。
「全然くだらなくないわ…!」
――お前の願いは我の願い。お前の夢を、共に叶えさせてくれ
じゃあ…いこうよ、シロ。
霊夢は飛び上がると同時に腰をひねり、未だ体を走る冷たい感覚に囚われたままの禍王の顔面目掛けて渾身のパンチを繰り出す。
ドン、と凄まじい音が響き、禍王の顔面ど真ん中に拳が深く突き刺さる。禍王の上体が後ろへ反れ、一歩後ずさる。
「ぬぐ…!」

が、禍王は体勢を立て直そうと足腰に力を入れ、霊夢の攻撃を押し返そうと図る。しかし、それは適わず、霊夢のパワーの方が上回ってしまい、禍王の体は大きく吹っ飛ばされた。
先ほどまでとは全く違う。霊夢の攻撃は禍王に対してまともなダメージを与えていた。
「今わかったわ…！私は頭の中でシロが教えてくれるやり方で攻撃をしてたけども、今までのように無意識に霊力に頼ろうとしていた…でもそれじゃ上手くいかないのは当然だわ！今の私は〝妖怪〟なんだもの。私が妖怪になるってことは、シロとひとつになるってこと！だから私は…妖怪と成ってこの力を振るうわ」
霊夢は吹っ飛ぶ禍王の行く先へ回り込み、長大な尾を斜め上へ向けて振るい、殴る。禍王の巨体がたやすく向きを変えて真上へ打ち上げられ、霊夢は飛び上がって全身から溢れ出るシロの妖力を纏う。
「本気出すわ」
そのまま体を丸めてタイヤのように高速で縦回転し、青い炎のような妖力を迸らせる。そのまま空中の禍王へ突撃し、その巨体を再び弾き飛ばした。
禍王は隕石の如きすさまじい勢いで空中を飛び、人里の上空を超えて先ほどまで霊夢たちがいたマガノ国の基地の目の前へ迫る。
「うおおおッ!?」
新子は驚きながら飛びのいてそれを躱し、禍王が最初にやってきた時に出来たクレーターの中へ落下した巨大な塊を見下ろした。
「禍王…!?」
そこに仰向けで倒れている禍王は額から血を流し、胸に若干高熱に晒されたような赤い跡が出来ていた。
すぐに霊夢もやってきて新子の横へ降り立ち、少し息を切らす。
「おいお前…何があった…？」
「別に…ゼェ…ただちょっと…一発ぶちかましてやっただけよ…ハァ…！」
「クココココ…」
が、穴の中から禍王の唸り声が聞こえ、その後ゆっくりと起き上

がってくる。立ち上がってからコキコキと首を鳴らし、顎髭のように口周りから生えている触手を広げ、中にある口を見せる。その口元は…笑みを浮かべているように見えた。
「クココココ…！楽しいな…こんなに愉快なのは何年ぶりだろうな!?クココココ…」
どうやらこの唸り声は笑う時にも出るらしく、禍王は心底愉快そうに笑いたてる。その様子に不気味さすら覚えた霊夢と新子は、禍王を見上げながら唾をのむ。
「おい博麗…そうだ、その戦い方を忘れるな。戦いを再開しよう…と、その前に」
禍王は右腕の手首から肘までを覆うように装備していた手甲を弄り、どこかにあったスイッチのようなものに触った。カチ、と何かが外れる音が聞こえ、直後に手甲の手首部分から格納されていたであろう刃物が飛び出した。
「なによ…それ!?」
その、刃渡りがたったの５０センチほどの、見た感じは何の変哲もない剣のようにも見える刃。巨躯を誇る禍王の腕や手と比べるとナイフのように小さく見えるが、その刃が姿を現した瞬間、霊夢は今までに感じた事のない恐怖と焦燥に支配された。
「ヒュ…！」
吸った息すら吐き出すことができない。手足が震え、全身が粟立つ。
「どうした？おい…！」
尋常ではない様子を見せる霊夢に、新子は声をかける。
「やはり何か感じるか？キサマは今、妖そのものになっているしな…ただの人間じゃこれに秘められた力を感じることはできん」
霊夢とは裏腹に、新子はそれを見ても何も感じていない。一体あれがどうしたというんだ？という顔で刃と霊夢の顔を交互に見ている。
「キサマらを認めたからこそ、これを見せたんだぜ」
「なんなのよ…それ！」
勘と本能が激しく告げている。今すぐにあの刃物から距離をとれ、

刃先の向いている先へ立つな、と。あの刃…剣…いや、アレは…
「これは槍…己が妖怪を支配するために必要な道具だ。確か…妖怪どもの中には、これを〝獣の槍〟と呼ぶやつもいるな」
禍王の周囲に紫色をした禍々しい妖気が渦を巻くように集約していき、その体へ吸収される。禍王の後頭部と首周りからぞわぞわと黒く長い鬣が伸び、彼の目つきが獣のように鋭くなった。

第七話「未知の獣と白き獣」

「これは槍…己が妖怪を支配するために必要な道具だ。確か…妖怪どもの中には、これを〝獣の槍〟と呼ぶやつもいるな」

禍王の周囲に紫色をした禍々しい妖気が渦を巻くように集約していき、その体へ吸収される。禍王の後頭部と首周りからぞわぞわと黒く長い鬣が伸び、彼の目つきが獣のように鋭くなった。

明らかに異様な変貌を遂げた禍王を前に、霊夢は思わず膝をついてしまう。何故かはわからないが、禍王が獣の槍と呼んだあの武器に対して本能的に恐れを抱いてしまっている。

が、隣にいる新子はそんなことはなかった。新子だけは冷静に、禍王の変貌を観察することが出来た。あの黒い鬣――いや、人間とは生える位置が違うだけで髪の毛なのだろう――と、野獣のように黄色く鋭くなった双眼は霊夢の変化と少し似ていると感じた。ただ、霊夢は髪が白く、眼の色は深紅だ。

「さて…はじめよう、己とキサマらの戦いを――！」

禍王は足を踏み出し、ズンズンとふたりへ歩み寄りながら獣の槍を携えた腕を上げ、振り下ろす。霊夢はただでさえデカい禍王の巨体が、その覇気と自らの恐怖によってさらに山のように大きく見え、威圧されるもなんとか後ろへ飛び退いた。

ガキン！

新子は自らの所持する金棒〝カンダチ〟を振るい、一撃を受け止める。

「クココココ！やはりやるな、キサマ！」

「くっ……！」

しかし、跳ね返されてしまう新子。

その時、その後ろから霊夢が飛び出し、再び体をタイヤのように回転させ青い炎を纏った状態で体当たりを仕掛けた。

「いつまでも私がビビってると思ってんじゃねぇわよ！」

霊夢は恐怖をかき消し、完全にものとした妖怪の力を使って攻撃する。当たれば、先ほどのように禍王に対しては有効なダメージを与え

られるはずだ。
が、禍王は獣の槍を装備した右腕を霊夢へ向け、迎撃を構えを取る。
「!?」
たったそれだけで霊夢はただならぬ悪寒を感じ、回転を止めて再び後ろへ下がる。
「あぁ…?おいさっきから何やってんだ!」
新子がその様子を見ながら苛立って声をかける。
「クココココ…まあ言ってやるな、その巫女は相当この槍が恐ろしいと見える」
「んなわけねーでしょ!だれがそんな爪楊枝にビビってるって〜〜!?」
霊夢はそう言いながら胸を張りだして息を吸い込み、目いっぱいの青い炎を口から吐き出した。それは槍が届かない位置から禍王に届き、その体に降りかかる。
「効かん」
確かにその炎は禍王の体に燃え移りはしたものの、なんと槍を振るわれた瞬間、まるで炎が実体を持ったかのように両断されたのだった。
「うそ!?」
さらに、禍王が背負っている銀色の武装から砲身が伸び、その砲口から青い電気の塊のようなエネルギー球が発射された。それは怯んだ霊夢へ直撃し、炸裂する。
「が……!」
「プラズマ砲だ、全身の水分が爆発して消し飛びそうになるだろ?」
霊夢は耐えがたい激痛に全身を襲われ、背中から地面へ落下する。
(強い……!近寄ればあの槍が…離れれば他の武装が厄介……!)
禍王は首をかしげながら、起き上がろうともがく霊夢を見つめる。その様子は何かを待っているようであったが、すぐに痺れを切らし、右腕の槍を構えて走り出す。
「はやく動け!動けなくなった者から狩られていくのが常だぞ!」
そして槍の一撃を振りかざした瞬間…

ガキィン!!
またしても前に割り込んだ新子の振るうカンダチが禍王を弾く。しかし、禍王はすぐに踵が地面に埋まるほど踏み込み、前へ飛び出して槍を横に振るう。
「やべぇ!」
新子は胴体を真っ二つに切断されるかと思ったが、なんと不思議なことに、禍王の槍は新子の体へ触れても一切傷つけることなく、まるで透き通るようにすり抜けた。結果、槍は新子の持っているカンダチのみに直撃し、カンダチは新子の手を離れて回転しながら吹っ飛んでしまう。
「クココココ!この槍は人間には当たらねぇんだ!」
そう言いながら放たれた禍王の蹴りが新子に命中し、新子は枯れ枝のように吹き飛ばされる。
そして、いよいよ禍王は霊夢へと迫り、獣の槍を勢いよく振るい、突き立てようとする。万事休す、この槍で突かれた瞬間、妖怪と化している今の霊夢はどうなってしまうかわからない!
ピピピピピピ…
だが、突然耳に甲高い電子音が鳴り響いたと思った瞬間、禍王の動きがピタリと止まる。目の前の霊夢と、少し離れた場所で倒れている新子が困惑していると、禍王はスッと普通の立ち姿になり、左腕に装着されている手甲を触って操作する。
「なんのつもりだ?いいところだったんだが」
そして手甲に向かってそう語り掛ける。
「…ああ、そうだが…この辺で打ち止めにしておくか」
そう言うと手甲を操作して何者かとの通信を切り、右腕の獣の槍を引っ込める。黒い鬣がその場で千切れて地面に落ちて溶けるようにして消失し、目つきも元に戻り、全身から漏れ出ていた禍々しい妖気も消える。
「命拾いしたな、勝負はお預けだ。己は帰るぞ…キサマらがマガノ国と呼ぶ場所へな」
「なぜ…?」

「さてな。おい、さっき己が言ったことは覚えてるか？巫女よ、幻想郷を救いたくば己の野望を全て打ち砕き、己を討ち果たして見せろ！己はマガノ国にて待つ！」
「ええ、せいぜいマガノ国で首を洗って待ってなさい！すぐにアンタの企み全部ぶっ壊して、アンタごとマガノ国を幻想郷から追い出してやるわ！」
　霊夢は立ち上がり、まっすぐに禍王と向き合い、その目を睨みながら豪語した。両者はしばし睨み合っていたが、やがて禍王が笑った。
「クココココココ…！ああ、やってみろ！この世に不可能なことは何ひとつないからな。せいぜい強くなれ」
「当り前よ…！」
　禍王は霊夢の返答を聞くと背中を向け、背中の武装から猛烈な突風を一瞬のみ噴射し、ドンッと大砲のような音と衝撃と共にマガノ国のある方角へと飛び去って行った。
「く…ハァ…！」
　霊夢はその場で膝をつき、変身を解く。白い髪が途中で千切れて短くなって黒くなり、目や爪の変化、腰から伸びる白い尾も元に戻る。
「いてて…なんだったんだよ全く…」
　新子もジャケットについた砂を払いながら呟いた。霊夢は息を整えてすぐに立ち上がり、後ろにある憲兵隊の基地を見る。
「オイ、テメェの所為でアタシまでなんか巻き込まれちまったじゃねぇか！おい聞いてんのか!?」
　新子が霊夢の胸ぐらをつかみながらそう怒鳴るが、霊夢はもう先ほどの出来事についてはいったん頭から追いやっていた。さらに、霊夢の腹から大きな虫の音が鳴ったので新子は少しドン引きながら手を離した。
「私、もとは腹いっぱい食べるためにここに来たんだった」
「ああ？…って、おいまさか…」

「母ちゃん、お腹すいたよー！」

「泣き言を言わないで！そろそろ憲兵さんが来る時間だから、またおこぼれを貰えるから…」
「いつもあれくらいじゃ足りないよ！」
「でも遅いわねぇ、憲兵さんたち…」
「ああ、あんな奴らでも俺たちが生きてくにゃいてくんなきゃ困っちまう…！」
　人里で起こった騒ぎが落ち着いたころ、また何か別の物事によるざわめきが起こっているのに人々は気付いた。
「今度は何の騒ぎだ？」
「な、なんかでっかい荷車が来たぞ」
　人々が目にしたものは、家よりもうず高く荷物を積まれた何台もの荷車だった。主に里の中でも荒くれ者として知られるガラの悪い男たちが何人もかかって荷車を押している。
「おいテメェら！見てねぇで持ってけるだけ持ってけ！」
　荷車を押す男たちが周囲の人々へ向けて怒鳴る。
「持ってけって言われても…そりゃ一体なんだい？」
「食いもんさ。この荷車に積んであるもの、全部食いもんだとよ！」
「ええ？そんな馬鹿な…そんな量をどうやって手に入れたってんだい！」
「俺たちが知るかよ…！ただ、俺たちは親分にこれを配って回れって言われただけだからな」
　ひとりが恐る恐る荷車に近寄り、荷物を覆っている布をめくって中身を確認する。その瞬間、その人は声を上げて尻もちをついた。
「ほんとだ…！中に…食べ物が…！」
「ほんとかよ…！」
「これほんとに貰っていいのかい…？」
「だからいいって言ってるだろ！親分にそう言われたんだよ！」
　人々は一斉に荷車に駆け寄り、一斉に布を外した。すると、その下に隠されていたものは、やはり大量の食糧だった。米や味噌、野菜に果物、さらには干した魚や肉、樽に入ったきれいな水まで様々な食べ物が見える。

人々は荒くれどもが見張る中、信じられない出来事に遭遇したような顔で両手に持てるだけの食料を持って立ち去っていく。中には我慢できずにその場で野菜や干し魚に食らいつく者もおり、小さな子供たちもリンゴやブドウを頬張っている。
「おいしーい！」
「お、オラ、肉なんて1年ぶり…！」
「飲んでも飲みつくせねぇほどの水！水っ腹なったの久々だ！」
突然降ってわいた、食べても食べつくせないほどの量の食料を手に入れた里の人々は思い思いに腹を満たす。
その様子を、建物の屋根の上から新子と霊夢が眺めていた。
「結果的にできたからよかったがよォ、憲兵全員ぶっ倒して貯めてる食いもん全部奪うなんて思いつくか？アタシらでもそんな盗賊みてぇな真似しねぇぞ」
新子も骨のついた干し肉を齧り、咀嚼しながら霊夢にそう言った。
霊夢も屋根の傾斜で寝そべりながら、口の中から魚の骨を抜き取る。
「まず腹ごしらえしないと何事もうまくいかないでしょ。憲兵ぶっ倒すのも食べ物配るのもただのついでよ」
霊夢と新子は憲兵が全滅した基地の中から貯蓄されていた食料をありったけ引っ張り出し、荷車へ積み込んだ。その後に新子が子分の荒くれ者たちを呼び寄せ、これを運ばせたのだ。
「あの食料全部マガノ国で作られたモンだと思うが…なかなかうめぇな」
「でしょうね。マガノ国は幻想郷の品種や生き物を独占して養殖してる。使ってる水も本来は幻想郷に湧いてくるものよ。でも本当の幻想郷の恵みはこんなもんじゃないわよ、すぐに私が前みたいにみんなが好きなだけ飲み食いできる幻想郷に戻して見せる」
「それがアンタの目的か？あんな派手に禍王とやり合ったんだ…ほかに何かあるんじゃねぇのか？」
「それは…」
霊夢が何かを話そうとしたとき、新子の元へ子分に一人が現れ、小声で何かを伝えた。

「…そうか、わかった」
「どうしたの？」
「博麗霊夢、アンタも一緒にアタシと来い。〝大親分〟が話をしたいんだと」

第八話　「マミゾウ大親分」

「で、大親分ってなに？親分はアンタなんでしょ？」
　里の路地裏を歩きながら、霊夢は前を歩く新子に尋ねた。
「ああ。その名の通り、アタシよりも上の大親分ってことだ。昔に助けられてな…それから世話になってんだ」
「ふーん…」
「ついたぞ」
　新子は路地裏の建物の壁に張ってあった簾を退かす。すると、そこには壁と同じ白いペンキで塗られた戸があった。
「りんごは？」
　戸の内側から声が聞こえた。霊夢は新子をちらりと見ると、新子はジャケットの内側から、先ほど基地の中で奪ったひとつの林檎を取り出した。
「皮が硬くて酸っぱいのがひとつ」
　そう言うと、戸がカチリと音を立て、内側から開いた。新子はその中へ入り、霊夢も後を追う。中は至って普通の内装と間取りで、タバコの匂いが立ち込めている。
「あれ、アンタ…？」
　その時、霊夢は内側の戸の端に誰かが座り込んでいるのに気付いた。それは痩せた女性で、頭に布を巻き、ボロい着物を纏っている。手には新子から渡されたであろうリンゴを持ち、暗い目つきで霊夢を見上げた。
　何故かその女性に見覚えがあると感じた霊夢であったが…
「おい、行くぞ」
　新子にそう言われて急かされたのでとりあえずその疑問は置いておくことにした
　ふたりは軋む廊下を歩き、やがてとある一室の襖の前へたどり着いた。新子は身を低くしながら襖を開け、その奥へ入る。
「大親分！博麗の巫女を連れて来やした！マミゾウ大親分！」
　部屋の真ん中にある囲炉裏の前で座椅子に腰かけ、葉巻を吸いなが

らこちらを向いたのは、なんとあの二ッ岩マミゾウであった。
「アンタ…マミゾウ?!」
マミゾウは狸の尻尾を引っ込めて人間に擬態していた。
「おい!言葉を慎めよ!」
新子が霊夢の頭を押さえつける。だが、マミゾウは煙を吐き出しながら笑った。
「ほっほっほっほ…新子、別によいわ。しかし久しぶりじゃのう博麗霊夢…博麗の巫女さんよ」
「何してんのよこんなところで…」
「この幻想郷が禍王の手によって陥落して以降、隠れておった」
3年前、幻想郷はマガノ国の支配下へ堕ちた。その際、多数の妖怪が消失したり姿を消したりしており、霊夢はマミゾウもそのような妖怪の一匹だと思っていたが、どうやら自分が気付かなかっただけでずっとここでならず者たちを束ねていたらしい。
「へぇ…」
「巫女さんよ、先ほどの戦い…見ておったぞ。昨日までの腑抜けた様子のお主とはえらい気迫が違ったが…何かあったのかの?」
マミゾウの眼鏡の奥から鋭い視線が霊夢に向けられる。だが、霊夢は何ともない様子で小さく微笑みながら言い返す。
「さぁ?別に何もないけど」
「そうか?あの巨大な化け物はなんじゃ?マガノ国の怪物に見えたが…よもや、あれが禍王本人であった…なんてことはないじゃろう?」
「ないわね」
「ほっほっほ…では、お主のあの姿はなんじゃ?随分と猛々しい妖気を身にまとっていたようじゃが…今までのお主が出来た芸当ではないはず。もしかすると、いつもお主の後をついていた小さな狐がいないことが、何か関係しておるのかのう?」
そう言ったマミゾウの言葉には真剣さと同時に問い詰めるような棘が含まれており、霊夢もそれを聞いて少し険しい顔になった。
「…それは」
「巫女よ、昨日までのお主は、正直言って牙どころか爪すら抜かれ、絶

望の中で横たわるオオカミのようだった。しかし、今日のお主はどこか違う…お主から感じる覇気は炎がごとく燻っている。一体、何があった？いいや、それよりもずっと聞きたかったことがある…誰もが疑問に思いながらもお主に言い出せなかったことだ。皆、答えを聞かぬままこの地を去った…」

マミゾウはいよいよ本題に切り込む。

「お主、博麗霊夢は3年前、マガノ国で一体何を見たのじゃ？」

「…じゃあマミゾウ大親分、アタシはこれで…」

その時、新子はただならぬ雰囲気を感じてそそくさと部屋を出ようと背を向ける。

「いいや、新子。お前さんも聞くのじゃ」

が、そうマミゾウに呼び止められると、新子は渋々といった様子で立ち止まる。

「わかったわ、全て話すわ。私がマガノ国での1週間、何を見たかを…」

…今から4年前、幻想郷は流星群に見舞われ多大なダメージを受けた。その時の混乱に乗じるように姿を現したのがマガノ国だった。

マガノ国はたびたび幻想郷を襲撃し、そのたびに妖怪の数が減っていった。それが1年続き、今から3年前、ついに幻想郷とマガノ国との全面対決へと発展した。

マガノ国は外の世界から呼び寄せたと思われる巨大な怪鳥や霊獣、そして粗悪だが屈強な兵士たちを幻想郷へ送り込んだ。

「おい、アイツら無敵か!?なんで味方に自分らごと攻撃させてんだ!?」

マガノ国の軍勢が強大だった要因は前述の巨大な怪物たちの猛攻はもちろん、とにかく数の多さにあった。そしてさらに、彼ら全員が恐れというものを知らなかったことにある。

ある程度の力を持つ妖怪にとっては、吹けば散るようなパワーしか持たない兵士たちであっても、彼らはいくら仲間が無惨に倒されようが恐怖というものを感じないため、文字通り全員が力尽きるまでこちらへ攻撃を繰り返してきた。さらに、そんな彼らが妖怪たちへ纏わり

ついて動きを封じ、その隙に怪物たちが味方の兵士もろとも妖怪たちを跡形も無く吹き飛ばすという手段まで取って来た。
恐怖を糧とする妖怪たちも思うように力を発揮できず、追いつめられる。しかし、そんな戦況を覆したのが人間たちである。博麗霊夢を筆頭とする異変解決のプロたちの参戦によってマガノ国軍は押し返され、いよいよ撤退を取らせることができた。
「霊夢、私はもうここまでだ…あとはお前にかかってるぞ！」
魔理沙はたまらずに去っていくマガノ国の軍勢を悔し気に睨みながら、霊夢へそう言った。既にこの戦いに出向いてきた者たちは全員疲弊し、もう敵を追撃するほどの余力は残されていなかった。
「…わかった！」
霊夢は烈火の如き勢いで敵を追い、マガノ国へ殴りこんでいった。皆が希望を託した。マガノ国による侵略を止めるには、この博麗の巫女たる霊夢の力が必要だと。
「頼む…」
「勝ってくれ、巫女…」

（許せないわ…毎日毎日マガノ国の奴らが騒ぎを起こすから、おちおち宴会もできやしない！野菜も魚も獲れなくなって、食うものにも困る日々…！ってか、そもそもこんな事態になってるってのに紫や賢者どもは何してんのよ!?）
「ここがマガノ国!?」
妖怪の山とその左右に連なる山脈を越えた先には、赤茶けた死の大地が広がっていた。いくつもの半円の形に窪んだクレーターがあり、そのくぼみの中に町のような建物がポツポツとあるのが見える。
その中にいくつか大きな建造物があり、古代のコロシアムを彷彿とさせるものや、周囲を竹で組まれた足場に囲まれた建築途中の何か、そして一番向こう側にあるひときわ巨大な銀色の不思議な形状をした城のような建造物。
霊夢はすぐにこのマガノ国という土地に根付く禍々しい邪気を感じ取り、その瞬間に全身の肌が粟立ち吐き気を催した。

（ここは…なんかヤバイ！全く理解の及ばない得体のしれない何かの悪意が渦巻いている…）
凄まじい悪寒。今すぐにでも引き返して、一刻も早くここを出たい。
だが、霊夢はそんな感情を何とか押し殺し、一番巨大な建物を目指して高速で空を飛ぶ。霊夢の勘が、あの建物に敵の首魁とされる禍王がいると告げていた。
「何を言ってんのよ博麗霊夢!!ここまで来たからにはやることはひとつ！禍王ってヤツをぶっ倒して、そのままマガノ国を壊滅させて幻想郷へ帰る!!」
霊夢は全身に真っ赤な霊力を纏い、大きく振りかぶったお祓い棒に七色の覇気を込める。そして、ぐんぐんと近づいてくる銀色の城目がけて振り下ろそうと渾身のパワーを発揮する。
…キンッ　ギュオン!!
「…ッ?!!」
しかし、霊夢は突然側頭部へ強い衝撃を受け、視界が真っ白に染まった。何が起こったのか理解した時には、既に霊夢は銀色の城近くのクレーターの斜面にめり込む形で仰向けに突っ伏していた。
何が起こったのか…そう、空中より奇襲を仕掛けてきた何者かの飛び蹴りを喰らい、ここまで吹っ飛ばされてきたのだ。
「いった…」
背中が痛み、頭から血が流れてくる。
「おーおー、一体何者だお前は」
「…きひひひひっ」
その時、目の前に降りてきたのはふたりの見知らぬ女。最初に喋ったであろう方は、深い緑色の長い髪を三つ編みにし、黒いぴったりしたズボンと赤いシャツを纏い、腰の後ろからは四角く硬質な鱗に覆われたトカゲのような長い尻尾が見える。
もうひとりは、背中に大きな黒い翼を持ち、足元まで隠れる黒いロングスカートと外套を纏う、眉毛のない凶悪な目つきと釘のような歯が並んだ口を釣り上げて笑みを浮かべている女だった。

どちらも並々ならぬ妖力を放ち、妖怪としての格はかなり上澄み…もしも幻想郷にいたならば一度は目にするか存在に感づいたことがあるだろうレベルだ。それでも霊夢が初見だということは、恐らくこのふたりは外の世界からマガノ国へやって来た妖怪であるのだろう。

「…うおっ!?」

だが、霊夢は質問に答えることも怯むこともなく、先ほどまで溜めていた霊力を乗せたお祓い棒を振るった。自在に伸縮するそれはあのふたりの元まで届いた。

しかし、彼女らは身を翻してそれを躱す。霊夢はすかさず立ち上がり、もう一度攻撃をお見舞いしようと飛び上がった。

「おとなしく…しろ!!」

が、緑髪の妖怪はお祓い棒を掴んで受け止め、霊夢の腹へ強烈な蹴りを叩きこむ。続けて黒髪の妖怪がせき込んで怯んだ霊夢の首を掴み、そのまま空高く上昇し、その後一気に急降下して勢いづけたまま地面へ叩きつけた。

「ぐは…う…!」

霊夢は地面を転がり、泥だらけの姿でうつ伏せになる。緑髪の妖怪が霊夢に近寄り、髪の毛を掴んでその身体を無理やり持ち上げる。

「あ…!」

「おい、何だコイツは?見たところ人間らしいが」

(クソッ…体が動かない…!)

幻想郷での激しい戦いを終えてマガノ国へ直行してきた霊夢の体力は既に限界に近かった。確かにこのふたりは強いが、それでも霊夢が万全の状態であれば何とかすることもできたかもしれない。しかし、今の疲弊した霊夢ではこれ以上抵抗することもできなかった。

「まさか、こんなのがうわさに聞く博麗の巫女とやらか?…まあいいか、とりあえず…総督のところへ連れていくか」

この時の霊夢には、まだ隙を見て逃げ出して体力を回復させ、もう一度挑んでやろうという気概はあった。だが、これから先に見たものこそが、霊夢の心を折るには十分すぎる威力があったのだった…。

第九話「絶望と倦怠の波」

捕らえられた霊夢は、両手を後ろで拘束され、目隠しをされたままどこかを歩かされた。

どれだけ歩いただろう…しばらくすると目隠しを外され、赤い光が視界に指す。すぐに明るさに目が慣れ、周囲を見渡す。

ここはどこかの部屋の中…床は畳、壁には灯りが灯されていて、ぼんやりとしている。だが、目の前の襖の奥で胡坐をかき、膝の上で肘を立て顎を乗せて佇む大きな影を見てギョッとした。

「アンタ…まさか」

でかい。座っている状態で霊夢の身長の倍くらい高い。ゆったりとした和服を羽織り、蛸のような外見の頭部の口元に連なる触手が揺れ、瞳の平べったい黄色い目がじっとこちらを見据えている。

「貴様が博麗霊夢か」

「禍王!!」

瞬時に理解した。ずっと、どこで何をしていても常に頭の片隅でその存在を感知していた。寝ているときでさえもずっと、その圧倒的すぎる生命力を嫌でも感じてしまっていた。

ようやく分かった、その正体こそが、この禍王。

霊夢は勢い良く飛び上がり、手を拘束する鎖は破壊できなかったが、ならばとドロップキックの要領で両足を向けて襲い掛かる。

「何してんだ、控えろ下郎が」

だが、突然空中で首を掴まれ、勢いよく床へ顔面から叩きつけられる。そのまま強く押さえつけられ、身動きが取れなくなる。

「離しなさい…ッ!」

自分を押さえつけているのは、マガノ国へやってきた直後に自分を蹴り飛ばした鰐女だ。

「クココココ…顔を上げさせろ、和邇渕(わにぶち)」

禍王がそう言うと、和邇渕と呼ばれた鰐女は霊夢の後ろ髪を掴んでグイッと顔を引っ張り上げる。

「落ち着け、まずは話をしよう」

「落ち着けるわけないでしょ…！・まずはアンタが先に手下どもを幻想郷から引上げさせなさい！」
　霊夢は怒りの形相で歯を噛み締めながら禍王を睨む。
「まあ聞け、取引をしようじゃないか。その返答次第で、これからどうするか決めてやるぞ」
「取引ィ…!?」
「そうだ。博麗の巫女、お前は己の配下になれ！」
「はァ…!?」
　霊夢の額やこめかみにピキピキと青筋が浮かび、ますます怒りを露わにする。禍王は一切それにかまう様子無く続ける。
「己たちの依頼で幻想郷の妖怪どもを退治するのだ。報酬は出す。いいだろ？」
「ざっけんじゃないわよ！・どこまで私たちを馬鹿にすれば気が済むの!?」
「そうか。おい」
　禍王はそう言うと、部屋の外を顎で指す。すると和邇渕が再び霊夢を引っ張り上げ、無理やり立ち上がらせる。
「いつっ…」
　その時、右手に鋭い痛みを感じて視線を落とした。先ほど、和邇渕と共に自分を襲撃した片割れ…黒い外套とロングスカート、背中から翼を生やした凶悪な人相の妖怪が自分の指に噛みついていた。霊夢と目が遭うと、不気味に口の端を釣り上げて笑い、直後にブチッと勢いよく顎を引き、なんと霊夢の右手の人差し指と中指を噛み千切った。
「うっ…くああっ…！」
　両手を縛られているので傷口を押さえることも出来ず、髪を掴まれているのでその場で歯を噛み締めて痛みに呻くことしか出来ない霊夢。
「窮奇（きゅうき）、まだ早い！・いきなり指を千切るやつがあるか！」
「きひひひ…」
　窮奇と呼ばれた黒い女は指を飲み込み、気味悪く笑った。

「全く、私の部屋で爪からやろうと思ったが…総督、この者をさっそく外へ連れて行って構いませんね？」
「クココココ！ああ、好きにしろ」

…その後、博麗霊夢は磔にされた状態でマガノ国中を引き回された。その最中に霊夢が目撃したのは、マガノ国が使役している巨大な怪物たち、それらと奴隷にされた人間や妖怪を無理やり戦わせる闘技場。そして、奴隷を使って途方もなく巨大な石の建造物を組み上げている光景…奴隷は鉄筋で骨組みを作り、石灰と石を混ぜた灰色の粘土をその周囲へ固め、一体何なのかもわからない石の塔を作っている。
（殺す…）
霊夢はそれらを見ながら、胸の内に憎悪を煮えたぎらせる。虫唾の走る気味の悪い怪物ども。そして何よりも、奴隷として無理やり働かされる人間や妖怪たちの中には見たことのある姿もチラホラあり、そんな彼らの姿を見ていると、強く実感するのだ。
（マガノ国は絶対に私がぶっ潰して、禍王も誰も全員ぶっ殺してやる…！！）
マガノ国への殺意を。
それから、霊夢は何日にも渡って晒され続けた。禍王は霊夢の心を折るために拷問紛いの扱いを強いているのだろうが、霊夢は罵声を浴びようが和邇渕や窮奇に痛めつけられようが裸に剥かれようが絶対に反逆心を鎮めることはなかった。
というのも、霊夢には確固たるとある確信があったからだ。それは、八雲紫の存在である。マガノ国の存在が幻想郷に広まり始めてから、紫は一切表へ出てきていない。霊夢の勘は、紫はマガノ国へ対抗する手段をどこかで用意し、備えているだろうと告げているのだ。
（紫が来ればそれをきっかけにして敵を叩ける！だから早く来なさいよ、紫…！）
紫が来ればこの現状を打開できる。例えば、永遠に夜が明けない異変の時も共に解決に乗り出したこともある。
希望はある。だから今は耐え忍ぶんだ…今に紫が…

「…え…」
だが、霊夢は目ざとく発見してしまったのだ。遠くにある禍王の城の屋根の上で、偉そうに片膝を立てて座り込む禍王と、その左右につく和邇渕と窮奇の姿。そして、彼らと共に霊夢をゴミでも見るかのような心底憐れんだ表情で見下ろす、紫の姿を。
「…紫」
紫は禍王や和邇渕らと共に明らかにこちらを見ながら嘲笑ってくる。
(そっか…)
霊夢の仕事は主に妖怪退治や異変解決。それらは紫を筆頭とする賢者たちが作ったルールに基づいてのものである。他でもないその紫本人が、幻想郷史上最大の危機をもたらしている大異変の親玉とつるみ、自分を見て笑っている。
幻想郷のルールそのものがそのような態度をとるのであれば、霊夢はそれに従うほかない。ここまでですり減っていた心の支えを崩された霊夢はその場で項垂れ、それ以降はどんな喧騒も言葉も頭に入ってこなかった。

「博麗の巫女、従う気になったか?」
禍王の部屋にて、禍王は座り込んだまま項垂れる霊夢に声をかける。霊夢は下を向いたまま一言も発さない。
そこへ和邇渕が近寄り、耳元で言う。
「契約しようじゃないか。お前は我々の依頼する妖怪を殺す。我々はそれに応じた報酬をくれてやる。いいだろう?これから幻想郷の人間どもは食い物すら自力で調達できなくなる!しかしお前だけは今まで通りの仕事をするだけで飯が保証されるんだ、こんな待遇はないぞ」
しかし、霊夢はやはり何も反応しない。
「まあ、お前に断るという選択肢はないだろうがな。見ただろ?既に百を超える数もの人間と妖怪がこのマガノ国で奴隷として使役されている。つまりはそれだけの人質がこっちにいるようなものなんだ。

わかるよな？クハハハハ…」
　そこで、ようやく霊夢は少しだけ顔を上げた。
　目の前には片膝を立てて座り、ふんぞり返る禍王と、八雲紫と窮奇がそれに寄り添っている。
「…好きにしなさい」
「ははは、嬉しいよ、契約成立だな。それではさっそく仕事の依頼だ、お前がこの境地へ入ってきた時と同じ場所から幻想郷へ帰り、神社へ戻れ。その道中、近寄ってきた妖怪、目についた妖怪は一匹残らず始末しろ！」
「な…」
「前払いだ」
　小さい声で反論しようとする霊夢に、和邇渕は報酬の前払いとして一握りの米と味噌を押し付けて黙らせた。

「おお、巫女が…博麗が帰って来たぞ！」
　丸一週間が経過したころ、マガノ国との境目で霊夢を待っていた妖怪たちは、帰還した霊夢を出迎えた。かつては霊夢に退治され、敵対していたものも今回ばかりは霊夢の活躍を期待せざるを得なかった。
　だが…霊夢は近寄る妖怪たちを圧倒的な力で薙ぎ払い、寄せ付けない。
「なぜだ、博麗の巫女!!」
「マガノ国の奴らを倒したんじゃないのか!?」
　霊夢は何も答えず、神社へ向けて一直線に飛んでいく。突然の理不尽な仕打ちを受けて怒る妖怪、真相が気になる妖怪たちが彼女を追いかけるが、そんな彼らをも霊夢は吹き飛ばしていく。
「…なんでだ？一体お前に、何があったんだよ…」
　同じく霊夢の期間を待ちわびていた霧雨魔理沙も、妖怪たちを蹴散らしてゆく霊夢の姿を遠目で見ながら絶望し、拳を握り締めるのだった。

――――――――――――――――――…

「…これが、私がマガノ国で見た全てだわ」
話を終えた霊夢。マミゾウは何も言わないが真剣な表情で頷き、新子は驚いた表情で震えている。
「な…テメェ、そんな目に遭って…たの…かよ…!?」
「霊夢よ」
マミゾウが口を開く。
「大体そんな事情だろうとは察していたが、そりゃあ…誰にも言えず、つらい思いをしたのう…」
その言葉を聞いた瞬間、霊夢の口元が歪み、目頭が熱くなってしまう。が、そのまま顔を上げてどうってことないように振舞う。
「いや…私が奴らに折れてしまったのは紛れもない事実！でも…私には大事な家族がいた。絶望と倦怠に沈んだ私に寄り添ってくれて…最期に、一緒に夢を叶えようって言ってくれた。だから私は絶対に夢を叶える！そのためにマガノ国は…絶対にぶっ壊してやるのよ！」